

蒼生

そう せい

1 2024年
月号

新年あいさつ

院長 森末正博



来ない状況が続きます。今年のうちには早期解決へ向けた動きが見られることを願ってやみません。

感染症、高血圧、糖尿病を含む代謝疾患、透折も含めた腎疾患、手術が必要な急性腹部救急疾患、骨折を含む四肢運動器外傷、手術・化学療法を含めたがん治療、緩和ケア、特に鏡視下呼吸器・消化器の手術)のさらなる質の向上を図ることに加えて地域医療機関への当院から情報発信を強化することで患者さんの当院への受診増、病・病連携強化による迅速な患者さんの移動に繋がってほしいと思います。また、今後制度の改正がなされても、皆様のご要望に継続的に応えることが出来るように組織の改革や人的な教育・補充など多方面にわたり改革を進めていきます。しかし、残念ながら様々な工夫や対応を加えても仕事の効率化・業績の改善が見られない部門に関しては大胆な変更・改革が必要と思います。

なお、大幅な変更といえば、長らく介護療養病棟を50床で運営していましたが、2024年3月末をもって廃止となり、これからは「介護医療院くすもと」の新たな開設となります。厚労省によりますと、介護医療院とは経管栄養・喀痰吸引等の日常生活上に必要な医療処置や充実した看取りを実施する体制、利用者の生活様式に配慮し、長期療養生を送るのにふさわしいプライバシーの尊重、家族や地域住民との交流が可能となる環境が整えられた施設、と示されており、今後はこの施設を運営するにあたり、ご利用者の尊厳の保持と自立支援を理念に掲げ、地域に貢献し地域に開かれた交流施設としての役割を担うように進めていきたいと思っております。

本年も引き続き地域医療機関・介護施設との連携強化を一段と進め、患者さんのご要望に沿う形で診療と介護が途切れなく進めていけるよう組織力をUPしていきます。益々の皆様方のご支援ご協力をよろしく願いたします。

新年あけましておめでとうございませう。新型コロナウイルス感染症が昨年5月に5類に移り、感染の拡大が止まらず、人的交流も回復基調となりました。しかし、昨年10月以降は感染対策の補助金もなくなり、今後多くの入院機能を持つ医療機関は経営的に苦境に陥ることも予想されます。また、海外に目を向ければ、ロシア・ウクライナ戦争、ガザのイスラエル・ハマスの戦争と、どちらも民間人の犠牲が増大し悲惨な状況が続いております。世界中に人の争いは絶えることを知りません。人類の歴史もそんな戦いの連続であることを示しております。愚かな人類であると嘆いてみても致し方ありません。世界中の有能な指導者が一堂に会しても、建設的でない結論を導き出すことが出

年のうちに早期解決へ向けた動きが見られることを願ってやみません。

こと医療に関しては、本年四月に医療報酬・介護報酬の同時改定を控えております。また、医師の働き方改革の法的実施も行われ、これらの改正改革が今後の医療・介護の状況にどのような影響を与えていくか、非常に興味深いものがあります。また少子高齢化も一段と強まりますし、医療・介護分野の労働力不足も深刻化するものと思われま

せん。そんな中で、我々は曙の地で約35年間にわたり地域医療に取り組んできました。外来・入院・介護の3部門に地域の住民の皆様のご要望に添えるよう注力してきました。診療・介護のこれまでの実績の集積から得意な分野(2次輪番制救急医療、消化器疾患、慢性呼吸器疾患、

感染症、高血圧、糖尿病を含む代謝疾患、透折も含めた腎疾患、手術が必要な急性腹部救急疾患、骨折を含む四肢運動器外傷、手術・化学療法を含めたがん治療、緩和ケア、特に鏡視下呼吸器・消化器の手術)のさらなる質の向上を図ることに加えて地域医療機関への当院から情報発信を強化することで患者さんの当院への受診増、病・病連携強化による迅速な患者さんの移動に繋がってほしいと思います。また、今後制度の改正がなされても、皆様のご要望に継続的に応えることが出来るように組織の改革や人的な教育・補充など多方面にわたり改革を進めていきます。しかし、残念ながら様々な工夫や対応を加えても仕事の効率化・業績の改善が見られない部門に関しては大胆な変更・改革が必要と思います。

なお、大幅な変更といえば、長らく介護療養病棟を50床で運営していましたが、2024年3月末をもって廃止となり、これからは「介護医療院くすもと」の新たな開設となります。厚労省によりますと、介護医療院とは経管栄養・喀痰吸引等の日常生活上に必要な医療処置や充実した看取りを実施する体制、利用者の生活様式に配慮し、長期療養生を送るのにふさわしいプライバシーの尊重、家族や地域住民との交流が可能となる環境が整えられた施設、と示されており、今後はこの施設を運営するにあたり、ご利用者の尊厳の保持と自立支援を理念に掲げ、地域に貢献し地域に開かれた交流施設としての役割を担うように進めていきたいと思っております。

本年も引き続き地域医療機関・介護施設との連携強化を一段と進め、患者さんのご要望に沿う形で診療と介護が途切れなく進めていけるよう組織力をUPしていきます。益々の皆様方のご支援ご協力をよろしく願いたします。

車椅子生活で気づいたこと

名誉院長
飯島崇史

2014年夏、パーキンソン病を発病し、イスタンブール旅行を断念したが、治療を開始して改善。おかげでネパールに行けるようになった。だがその後病状は少し進行したので、脳内深部電極挿入術も受けた。しかし発病から9年たった今、しばしばすくみ足歩行から転倒を繰り返すようになって、歩行器や車椅子を利用するようにした。最近では電動車椅子も購入したおかげで旅行も可能となった。これらの道具の使用で旅行などの移動はすこぶる便利になった反面、いろいろな問題点も目に付くようになった。一部を紹介してみる。

だが、新幹線利用時には、予約しておけば車いす使用者は専用個室などが利用可能で、到着、のりかえ予定駅には連絡が届くようになっており、駅員はホームで待機している。しかし繁忙期で予約困難の時は、対応がむずかしい。安全面に対する指差し呼称の徹底も含め、全般的に昔の国鉄の時代とはみちがえるほどよくなったというのが実感である。

私事ではあるが、昔困っている人を見かけて手助けしようと思っても、気恥ずかしさが先に立ち、行動に移せないことがしばしばあった。しかし最近の若者にはそういう気負いが見られないように思う。混みあった電車やエレベーターで席を譲る、車椅子の介助者に手を貸す。これらの行為がごく自然に行えるようになった。社会の成熟度が増したといえよう。地道な教育の成果とも言えるのではないか。

先般広島で松任谷由実のコンサートを聴いた。グリーンアリーナに1万人の観客が集い、会場は熱気に包まれた。大音響のステージに戸惑ったが、昔のヒット曲メドレーには満足した。もちろん私は車椅子。家内に押しももらっての参加。終演後タクシーを探したが車椅子は敬遠され、手を挙げてもしまってくれない。そのうち小雨が。私は傘をさしていたが家内は車椅子を押しているため濡れてしまう。と、見知らぬアベックがそつと家内に濡れないよう傘をさしかけてくれていたのではないか。また近くでタクシーを待つて並んでいる人が対向車線の車を誘導してきてくれた。かくして多くの人の好意に支えられながらも、車椅子生活者たる私は自宅に引きこもることもなく、無事福山まで帰り着くことが出来たのである。かように近年の社会道徳向上には目を見張るべきものがあり、かつてのように、障害者は人の迷惑にならぬよう自宅にこもってひっそり暮らすのではなく、旅行も含め人並みの社会生活を通じて他の人とかかわりを持つことによつてリハビリの効果が期待できる。

しかし、問題がないわけではない。特に一般のタクシーは問題である。せつかくの電動車椅子がその重さゆえに(28kg)使えない。でも東京で利用したハイヤーは素晴らしかった。都内の混雑や長距離の移動を予想して、あらかじめ車椅子対応の介護用ハイヤーを予約していた。きめ細やかな対応も素晴らしく車両はベンツであった。用件は以前「くちなし会」でお世話になった日本画家西田俊英画伯(広島市立大学から武蔵野美術大学日本画科教授に転出)が定年退官されるにあたり、大学で大作「不死鳥」が公開されるとのことで、お祝いを兼ねて、ぜひ拝見したいと赴いた次第である。画伯はこの作品を描くため、1年間屋久島にアトリエを構えて住み込み、膨大なスケッチをもとに完成させたとのこと。小平市の美大特設美術館には教授夫人が待ち受けており、私の車椅子を押して3階にまで及ぶ全作品の解説をしていただいた。途中から手の



すいた教授も加わり、さらに詳細な解説を。奥様は2年前脳梗塞を患い、右下肢に不全麻痺が残っていた。恐縮の至りである。作品は詳細なスケッチをもとに壁一面に及ぶ屋久島の自然描写などを統一テーマで結び最終的には縦2・05m全長70mに達する巨大日本画（不死鳥）となる予定だが、現在44mで、30mほどが連結部分未完のため、完成時には連絡しますとのこと。人間と自然の森の共生、尽きることのない生命の循環の物語を紡ぐことを目指して一年間屋久島に移住して、日々山に分け入り写生にあけくれた。この前人未踏とも言える作品群を核に、西田画伯の原点となる少年時代の作品から、インド留学を経て、



森羅万象を神とする日本人の心で精緻な筆致で描いてきた27点の作品を通し、50年に及ぶ画業の軌跡を追うと解説にある。素晴らしい作品に感銘を受け、東京まで来た甲斐があったとお礼を言って会場を後にした。待たせてあった車に戻り、車椅子を押してもらい井之頭公園散策を。次回もこの車を利用して東京旅行をしたいものだ。非常に有意義な旅であった。

弁護士業界にあまり関わりのない人は弁護士に対して結構固定的なイメージを持っています。今回はそんな一つ、「弁護士ってみんな真面目で社会問題にも積極的に取り組んでいるんでしょ？」というものを取り上げてみたいと思います。結論から言うとこれは全然違います。社会問題にはさして興味がないかせいぜい世間一般の人並みという弁護士の方が多く、というのが実感です。とある大手ポータルサイトには弁護士専用の匿名掲示板形式のページがあるのですが、そこでは弁護士のホンネがダダ洩れです。経営不振や将来への不安、法テラスへの不満、コテハン同士の叩き合いなどが日夜繰り返られており、そこで社会問題が取り上げられることもあります。仕

～プロムナード～

弁護士は社会問題について熱心なのか

土道法律事務所 弁護士 飯島 充士

事や日々の暮らしに直結する話に比べると盛り上がりには欠けます。ではなぜそのようなイメージが出来上がるのかというと、最大の原因は会長声明でしょう。何か社会的に大きな出来事が起きたときに日弁連や単位会の会長が弁護士会として意見を表明するというアレです。そういうのが出されると普通の人は「弁護士会はそういう意見なんだ。弁護士は大半がそう考えてるんだ」と思いますよね。でも実際の手続がどうかというと、まず各種委員会が草案を作り、それが常議員会等で一応審議されて一応多数決で可決され、弁護士会の声明として会長名義で発表されるということになっています。ほとんどの弁護士は声明が発表されるまでその内容を知らませんし、何なら発表

された後も興味がないので内容を知らなくスルーします。さも弁護士全体の総意のように発表されていますが実は限られた一部の弁護士が関わって出しているに過ぎないんですね。これは一般的な弁護士からすると結構迷惑な話です。「戦争反対！」というように意見の割れなさそうなものからまだよいのですが、様々な意見があって然るべきもの、例えば死刑制度とか政治問題について「これが弁護士会の意見です！ 弁護士はみんなこう考えてますよ！」みたいな発表されると単純に鬱陶しいし依頼者その他からあれこれ言われて弁明が面倒くさいということもあるのです。私が見るに大半の弁護士は事務所の経営や処理中の事件、家族その他プライベートのことを第一に気にかけていて社会問題は二の次三の次です。

物の価値における私見

名誉院長 飯島崇史

我が家はおおむね築後30年になる。年数がたてばいろいろの問題点もでてくるが、荊妻自慢の食洗器が十数年経過した頃故障した。部品交換が必要とのこと。この食洗器、システムキッチンのこと。この食洗器、システムキッチンの一部だが、システムキッチン選定の時、設計士の反対を押し切り、日本製ではなくドイツ／アルノ社製の特注品を導入した。全体が純白の家具のように表面加工を施しており、汚れは拭くだけで落ちる。その代り、価格は家一軒購入できるほどかかった。

購入して年数が経っているので交換部品があるか心配したが、代理店の人は「大丈夫。フランス・ミーレ社に部品があります。ユーロ圏の製品は規格が統一されているので、日本のように年数が経つと部品がないため買い替えが必要になることはありません。どうぞ安心してお使いください」と。その後トラブルもなく毎日動いている。高額をかけた価値があった。ユーロツパの物を大切に考える考え方の側面を見たような気がする。

お盆に墓参りができなかつたので、9月思い立って高松に向かった。TVニュースで高松の市民墓地で無縁墓地化が進み問題となっていると報道されていたことも一因であった。確かに全く手入れされていない墓を最近よく見かける。掃除を済ませ、従姉妹に会うため連絡した。

同級生でもある従姉妹は夫婦で小児科医院を開業している。自宅にお邪魔して雑談しているとき、11月にベルリンフィルが香川県民ホールに来るので、聴きに行くという話になった。さらにチケットが高いいいかS席が売れ残っているという情報を得て、すぐさま申し込んだの言うまでもない。まったく幸運としか言いようがない。世界で多々ある交響楽団のうちウィーンフィルとベルリンフィルは最もチケットが取り

にくいとされているのだから。

開演は火曜日の19時。瀬戸大橋を使えば高松まで1時間半であった。指揮は主席指揮者、芸術監督キリル・ペトレ



本大進だが今回はプログラムBでR・シトラウスの交響詩「英雄の生涯」でソリストを務めるため、プログラムAの高松ではその姿が見られないのは残念であった。

開演とともに弦楽器の音が鳴り響いたが思わず鳥肌が立つようであった。通常数十挺の弦楽器で同じ音を弾いても個々の楽器の音程が微妙に異なるため、全体として音の幅が生じる。しかし聞くからに均一な音に聞こえる。流石としか言いようがない。

ベルクはなじみがないが、打楽器奏者がハンマーと呼ばれる木槌を打ち下ろして音を出すところをはじめて見た。ブラームスの交響曲4番は迫力満点であった。私が持っているのは、アーノンクール指揮の古楽器による演奏で、音量が抑えている。大音量の演奏に3階席まで満席となった観客の拍手が鳴りやまない。私も不自由な体を支えながらスタンディングオベーションで熱演に応えた。流石にベルリンフィルはすごいと感心した。